

シンポジウム

－「同志社にとっての 1876 年」－

## 余科（神学科）設置と 初期神学教育における相克

－熊本バンド、アメリカン・ボード、新島襄を巡って－

小 崎 眞

### はじめに

今回このような機会を与えて頂き、自らが受けた神学教育に関して整理する機会となりました。全く不勉強で、まとまりの無い内容ではありますが、発表させていただきます。

まず本日の発表の概略を次ページの図解で紹介させていただきます（図1参照）。冒頭、本井先生のご説明にもありましたように、「同志社にとっての 1876 年」は、余科として神学教育が始まった時であります。余科とは、いわゆる正科外科目（本科の課程とは別の科目）であり、京都府からの許可を得ていないということで、いわゆる「三十番教室」で始まった教育課程の事を指しています。この「三十番教室」での教育が、同志社の神学を形成し、近代日本における様々な神学議論をそこに内包することとなったと言えます。図1に提示したごとく、3つの神学的潮流を整理してみました。具体的には1)「熊本バンド」のこと、2) 会衆主義の宣教団体「アメリカン・ボード」のこと、そして、3) 新島自身の信仰理解です。この3つの相互作用により創出した同志社の神学世界の内実を探求してみようと思います。まずは、余科が始まる前の同志社の状況を確認し、その後、大越さんが言及した熊本バンド、特に L. L. ジェーンズ (Leroy Lansing Janes, 1837-1909) と熊本バンドのキリスト教理解に関して言及し、会衆主義のアメリカン・ボードの神学、さらには新島の信仰理解へと話を展開する予定です。

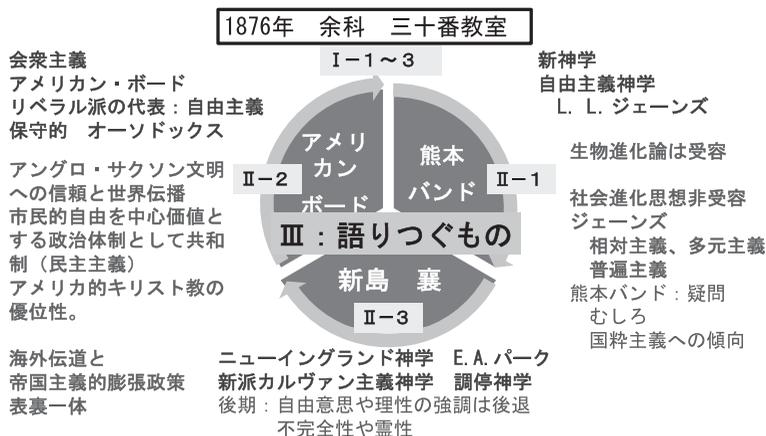


図 1

最初に問題意識を共有するため、同志社社史資料センター企画展の公開講演会で森孝一さんが指摘した問題提起から始めます。森さんは大変興味深いところに焦点を当て、次のように指摘しています。

同じアメリカン・ボードによって、同じ年に設立された神戸女学院と同志社は、アメリカン・ボードとの関係において対照的な歩みを続けてきました。その原因をあえて単純化して述べれば、同志社には熊本バンドが存在したが、神戸女学院にはそれにあたる存在がなかった。熊本バンドの背後には L. L. ジェーンズの存在があり、同志社における宣教師たちと熊本バンドとの対立点は、社会進化的な文明理解と新神学だった<sup>1)</sup>。

森さんの指摘を尊重すると、1876年、同志社での余科設置の出来事は、いわゆる「三十番教室」で神学教育が始まったことに留まらない歴史的意義を内包していることとなります。換言すれば、熊本バンドを迎える中で実践された同志社における初期神学教育に、今日にも通底する「信仰と理性」の課題（福音理解をめぐる課題：恩寵と自由意志）を確認することができま

す。さらに、アメリカン・ボードと熊本バンドとの葛藤の只中で苦悩する新島襄の福音理解を探求することを通し、21世紀の日本社会へと語り継ぐべき神学的課題に出会い得るのかもしれませんが。

## I. 「余科」設置（いわゆる「三十番教室」）を巡って

余科の誕生をもって同志社神学校開校とするのが通説<sup>2)</sup>ですが、余科を正規の神学校とみなしえるのか否かとの議論と合わせ、余科で実践された神学教育の内実（葛藤を含め）への検証が重要であります。さらに、神学的・文化的な事柄の錯綜への分析が期待されています。冒頭に触れた森さんの指摘にありますように、「三十番教室」で行われた教育は言い方を変えれば、日本におけるキリスト教理解のロールモデルであるのかもしれませんが。

熊本洋学校の課程を終えた（ジェーンズの教育を受けた）日本の学生たちは、アメリカン・ボードの宣教師、そして新島に対して、どのように向き合ったのだろうか、興味深いところであります。この余科誕生の背景にはいわゆる学内事情だけではなく学外事情もありました。官許同志社英学校という公に許可された学校では、聖書の授業は禁止されていました。そのため、キリスト教教育の実践のためには、あえて正科外という形で対応せざるを得なかったと言えます。興味深いのは、「修身」でキリスト教の授業は行って良いが、聖書積義を教えることは禁止されていました。京都府はキリスト教自体の教育に対してよりも、聖書の積義を巡る議論や教育に対して不安感あるいは危機を感じていたのかもしれませんが。

さらに余科の教育内容に関して、話を進めていきます。ご存知のように新島が福音書の積義、デイヴィスが組織神学、ドーンが旧約、ラーネッドが教会史、ゴードンが牧会学を担当していたようです<sup>3)</sup>。その中身をもう少し紹介します。初期神学教育を受けた小崎弘道の「筆記ノート（4冊の合綴、同志社大学神学部所蔵）」の検証を通し、同志社の神学教育の内実への探求を試みた研究成果があります。それによると、ジェーンズを通して高等な教育を受けていた熊本バンドの学生たちは、余科の教育を非科学的で前近代的内容として、失望していたようです<sup>4)</sup>。とは言え、余科の初期卒業生の卒業

テーマは多岐にわたり、キリスト教と文化、社会など、狭義の神学領域に限定されていないことや、学際的色彩が強いことが指摘されています<sup>5)</sup>。余科の神学教育が、教義学的関心より弁証的性格を強くし、キリスト教の真理性の一方的表明だけではなく、他の諸科学との関連において福音を弁明、さらに時代の問いと対話してゆく傾向があったこととなります。この背景にはアメリカン・ボードの宣教師の神学教育より、ジェーンズの教育を受けて入学してきた熊本バンドの学生気質に依ると言えます<sup>6)</sup>。そこで、熊本バンドの学生が影響を受けたジェーンズの神学に関して話を進めていきます。

## II-1. 初期神学教育：熊本バンドと Leroy Lansing Janes

1871年、熊本洋学校での教授を開始したジェーンズは、「キリストのキリスト教 (Christianity of Christ)」といった理性的な神学教育を提供したようです。学生たちは、いわゆる「自由主義神学」と呼ばれる新しい神学のジャンルに対して興味と関心を抱きました。ジェーンズ自身も彼らの期待に応えていったといえます。自由主義神学とは、簡潔に語るのであれば、聖書を批判的に検証する、あるいは社会の進化とか、近代合理主義の中で聖書を読み解く神学的姿勢です。この姿勢は、教会の神学を尊重する立場から著名な近代神学者のバルトの弁証法神学運動により批判されていきます。福音の「文化的キリスト教」への還元や教会と国家の同一化などが問題とされることとなります。結果、救済の道德化、個人主義化といった課題が生まれました<sup>7)</sup>。

落合建仁さんは熊本バンドに移植された神学、ジェーンズの影響を受けたキリスト教理解に関して鋭い分析を加えています<sup>8)</sup>。高道基さんの研究成果に基づき、ジェーンズの神学思想の特徴に関して次のように紹介しています。

- ・ 個性的、内発的なものを尊重するいわゆるリベラルな聖書主義
- ・ 形式的、儀式的なものへの嫌悪
- ・ 贖罪論がないこと
- ・ キリスト教の各宗派が分立している事への非難<sup>9)</sup>

ジェーンズの神学思想というのは非常に個人的、内発的であり、結果、教会の中で長く語られてきた教義学的な贖罪・罪の贖いという問題に対して消極的対応となっていきました。一方、横浜バンドの S. R. ブラウンは「キリストの教会（Church of Christ）」といった教會的神学教育を打ち立てようとしたようです<sup>10)</sup>。落合さんは、教會的であるか否かに注目し、ジェーンズのキリスト教理解に教會的視座が欠けていることを示唆し、加えて、近代啓蒙主義の影響を受けた批評的聖書解釈を基本とするジェーンズの神学的姿勢を顕にしています。落合さんはジェーンズのキリスト教理解が「十字架と復活、贖罪のキリストではないことは確かである」と結論づけています<sup>11)</sup>。

さらに落合さんは、このような特徴が生じる背景に、ジェーンズの個人史、特に両親の福音理解に言及し、父親の「強い合理主義」と母親の「信仰復興運動的メソジズムの反知性的傾向」との葛藤の中で彼のキリスト教理解が培われていったことを分析しています<sup>12)</sup>。ジェーンズは牧師ということではなく、むしろ教会を批判する立場でキリスト教に迫っていったと言えるのかもしれない。ゆえに勝手に洗礼を受けたり、饅頭と蜜柑をもって聖餐を行ったり、教会の伝統と異なる事を行なったのかもしれない。

以上のことから、熊本バンドの神学は同志社入学前からすでに自由主義的キリスト教の影響があり「新神学」であったと定義づけることができるのかもしれない。そこにはラディカルな聖書理解と聖霊典理解があったといえます<sup>13)</sup>。個人化したキリスト教理解は自分たちの文脈の中でのみ物事を捉えてしまう傾向へと陥り、愛国主義、国粹主義化へと流れ込んでしまう可能性を秘めていたと言えます<sup>14)</sup>。

一方、ジェーンズ自身は熊本バンドの学生との出会いを映し鏡のように捉えて、自分自身のキリスト教理解を見つめ直します。結果的に、彼のキリスト教理解は普遍的なものへと変容していった事を森孝一さんは、先の講演の中で指摘しております<sup>15)</sup>。この辺りは大変興味深い点ではありますが、詳細は今後の研究へ委ねたく思います。

## II-2. 初期神学教育：会衆派伝道団体 (アメリカン・ボード) を巡って

アメリカでのキリスト教伝道はアメリカのキリスト教化を目的として始まります。このアメリカ活性化運動の中で会衆派教会も生まれてきました。会衆派はアメリカ内ではなく、海外伝道へとエネルギーを向けていきました。さらに、その運動は「福音の伝達」から「文明の伝達」へと転換していきます。特に、20世紀に向けて、アメリカに与えられている使命は、アングロサクソン文明を世界に伝えることであったようです。アングロサクソン文明は市民的自由を中心的価値とする政治体制としての共和制であり、アメリカのキリスト教の伝播こそが最優先されていたようです。すなわち、アメリカのいわゆる対外交姿勢と会衆派運動が連動していることとなります。

一方、ジェーンズ自身はアメリカン・ボードに対して意外と批判的であったようです<sup>16)</sup>。ジェーンズの個人史の影響もあるのかもしれませんが、彼の姿勢は熊本バンドにも影響を与えることとなり、熊本バンドの神学自体が反アメリカンボード的状况に流れていくこととなります。このような状況の中にあって、アメリカン・ボードから派遣された新島襄は同志社での初期神学教育にどのように向き合っていたのでしょうか。新島自身が受けた神学教育の一端を探っていきたく思います。

## II-3. 初期神学教育：新島襄と E. A. パークを巡って

新島襄が出会ったキリスト教はピューリタンのキリスト教であり、「道徳哲学と組織神学の E・A・パーク教授のもとでピューリタニズムとコングリーゲーションナリズム (=会衆派主義) を基本とするニュー・イングランド神学<sup>17)</sup>」を徹底的に学んだと言われます。新島自身が「私はパーク教授の授業に出席し、新派 (注：カルヴァン主義あるいは神学) の人間であるに十分な理論 (theory enough to be a new-school man) を学んできました<sup>18)</sup>」と語るごとく、彼の神学は新派神学 (新派カルヴァン主義的福音理解) であったよう

です。よって、新島の神学と熊本バンドの神学（自由神学）とはつながりは無く、むしろ隔たりがあったとも言えます。いわゆる伝統的プロテスタント（旧派カルヴァン主義）は、人間の力ではなくて人間を超えたものの力に対して敬意を払う、「神の無償の恩恵」に与る姿勢を尊重しました。一方、新派カルヴァン主義は人間と神が競合して様々なものを展開していく、「人神協力的恩恵」という発想を尊重し、「調停神学<sup>19)</sup>」と語られるものです。

そこで、新島の神学思想を説教分析により探求した坂井さんの研究成果を参考にしつつ、新島のキリスト教理解を探ってみようと思います。簡潔にまとめると、初期の新島の神学思想は人間の自由意思、理性の強調であり、道徳的な罪理解であったようです。換言すれば、新派カルヴァン主義的と言えるのでしょうか。一方、晩年の新島の思想に関しては、自由意思や理性の強調は後退しているように思われ、ニューイングランド神学を素直に受容した新島がアメリカから帰国後、如何に自らの神学思想を構築していったのが次なる検討課題となるとの指摘で終えています<sup>20)</sup>。

1876年（「三十番教室」での初期神学教育の開始）以降、新島襄は次のような狭間の只中で苦悩することとなったのかもしれませんが。その苦悩は、日本における神学議論の中心課題として今なお問われているのかもしれませんが。

- ・「伝道を推し進めたい宣教師」と「伝道を禁ずる京都府」の狭間
- ・「宣教師の神学」と「熊本バンドの神学」の狭間
- ・「新島自身のキリスト教理解」と「上述の神学」の狭間

### Ⅲ. 語りつぐもの

今回、東京神学大学の背景<sup>21)</sup>の中で学ばれた研究者（落合、坂井、棚村）の成果を参照してきました。東京神学大学は教会の神学、教会のキリスト教に関心が強い研究教育機関でもあるため、教会で語られる説教自体への分析という方法で、新島の神学というものを捉えていこうとしたのかもしれませんが。一方、多数の聴衆に向けて語られる説教（言葉）は、既存の教義に縛ら

れ、形式化、形骸化へと陥る可能性をも含んでいます。さらに聴衆へ迫るあまり、コモンセンスへ迎合する傾向も否めません。

一方、新派カルヴァン主義には教会自体を超えた視点があるため、説教分析のみで、新島のキリスト教理解の本質へと迫ることが厳しいように思われます。新島は決して弁舌であったとは考えられていません。むしろ、「戸毎に説き人毎に諭す」と柏木義円が評するごとく<sup>22)</sup>、新島は各人との対話を尊重し、各人へ書簡を送る地道な伝道姿勢の中で、福音信仰を顕にしていたようです。新島は一人ひとりとの対話を尊重し、人ひとりの生命に向き合い、そこに働く不思議な力を確信していたように思われます<sup>23)</sup>。さらに新島は、新派カルヴァン主義的な良心、すなわち道德的責任の主体に根ざした良心理解に対して、人間の考え自体に閉ざすのではなくて、人間の判断を超えて、手放す視点を提供しています。同志社英学校の開校直前の現実（カリキュラムから聖書を除去すること）に対抗し、新島が吐露した「瓶の中のドングリ」との表現に彼のキリスト教理解を読み解くことができるように思います<sup>24)</sup>。

1876年の「余科」設置は、新島にとっては苦悩の始まりであったとも言えますが、同時に深い聖書理解への旅路の始まりでもありました。アメリカン・ボードと熊本バンドの福音理解をめぐる葛藤の渦の中で、新島の信仰は深化していったのでしょうか。そして、最晩年に『『笑って』風雪を侵して開く<sup>25)</sup>』と詠む新島の姿勢には自由主義神学の限界を超えた視座が彼の中に芽吹き始めたように思われます。本稿で紹介した坂井さんの研究成果もその事実の一端を顕にしています。1890年の新島の死と共に、新島の福音理解は熊本バンドの新神学的福音理解の前に燦る灯芯となったのかもしれませんが。今後、そのあたりへの丁寧な考察が期待されます。

以上で発表を終わります。

## 注

- 1) 森孝一「まかれた種－神戸女学院と同志社－」同志社社史資料センター企画展 公開講演会 2011年6月25日
- 2) 「初期の同志社における神学教育は、余科といわれ、英学校本科の課程を終えた

もので、キリスト教の指導者として働くもののため三年間の研修コースとして作られており、近代日本のキリスト教の働きにきわめて顕著な貢献をなした有力な卒業生たちを輩出した」と言われる。（『同志社百年史』通史編 1、p.112）。

- 3) 同書 p.105 以下参照。
- 4) 坂井悠佳「同志社英学校の教育と熊本バンドの思想形成」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』2019。坂井は以下の指摘をする。

創世記の講義は宣教師 E・T・ドーンが担当したが、講義について、「只字句の暗唱を強い、旧約の記事を其俚信ぜしめんとし、何等の説明をも加へない為生徒の不平は甚だしかつた。ゼエンスは旧約書を説明するに高等批評の結果を採用し、モーセの五経はモーセの著作でなく、世界の創造は幾千万年前の事とする杯科学的であつたのにドゥンが創造を以て紀元前四千年と説く如き論法には些も信を置く能はず、常に嘲笑と不平の声に満ちた」（小崎『七十年の回顧』44 頁）と回想されている。ノート③の記述はこの講義風景を裏付けるものである。冒頭に Lecture と記している以上は講義に関連したノートであるのは確かであろうが、講義の筆記に加え、地質年代や動植物の分類を考察し、これと創世記の記述とを並べ、小崎が「科学的」に創世記を検討していたことがうかがえる（坂井同書）。

さらに坂井は「聖書の読み方（Rules for Bible Reading）」として記されているノートを紹介し、以下のごとく、批判的実証的な聖書の読み方が実践されていたことを顕にしている。

1. その書の著者への共感から入る。著者について知りうる知識は身につけておく。著者が著述した状況と目的。
2. 最も公正な文法的な批評のみを採用する。釈義は、その書に関するあらゆる事項を引き出す。引き出すのであって、入り込むのではない。
3. 聖書言語は明快であるべきである。一明白で、直接的な方向の意味を採用する。最もシンプルであるもの—キリストの言葉。
4. その言葉が用いられた同時代の意味を採るべきであり、語源ではない。それらの言葉が用いられていた時代に持っていた意味を採る。
5. 聖書の言語は、真実が失われることのないように、人々の普通の信仰に配慮している。

- 5) 『同志社百年史』 pp.105-110
- 6) 同書 p.109
- 7) 自由主義神学は19世紀神学における一潮流で、復古的神学と調停神学に並ぶもの。「文化神学」ともいう。自由主義神学の特徴として、近代科学の成果を神学研究が受け入れ、社会の世俗化の傾向の持つ積極面を評価する。史的イエスの研究などがあげられる。信仰や教義の強制に反対し、教義の批判的再吟味、信仰と理性の調和、救済の主体化が促された。(『岩波 キリスト教辞典』参照)
- 8) 落合建仁「熊本バンドに移植された L. L. ジェーンズの神学・思想とその影響－「新神学問題」以前の隠された自由主義神学の流入－」『紀要』東京神学大学総合研究所 2010年
- 9) 同書、高道基「熊本バンドと新神学問題(覚え書)」『キリスト教社会問題研究』第7号(同志社大学人文科学研究所、1963年)。
- 10) 落合 前掲書 p.138
- 11) 同書

落合はジェーンズの『熊本回想録』(熊本日日新聞、1991)と“*Kumamoto: An Episode in Japan's Break from Feudalism*”を用いて、ジェーンズの聖書講義の再現に挑戦し、以下のごとく記している。

聖書にはいたるところに、その読者ならばだれしも気づいたに違いない黄金が隠されています。しかし、それを手に入れるためには、人は鉱夫のようにふるいにかけ、水で洗って迷信やナンセンスという砂利や沈泥の中から黄金を選び出し、独断や教義的神秘という花崗岩をたたきこわして、隠された真実を取り出さねばならない。

- 12) 同書 pp.135-136

落合は、フレット・G. ノートヘルファー(飛鳥井雅道訳)『アメリカのサムライ L. L. ジェーンズ大尉と日本』(法政大学出版局、1991年)を手掛かりとし、ジェーンズの信仰理解の背景に家族の信仰理解の影響があったことを指摘している。すなわち、ジェーンズ自身、厳格なカルヴァン派に育ち、アメリカの奴隷制度に対抗する父の影響から、日本の封建制度に対抗するジェーンズの姿を明らかにしている。一方、カルヴァン主義を公然と否定し、信仰復興運動的メソジズムの反知性的傾向の母の影響も指摘し、父親の強い合理主義の影響と狭間で葛藤があったことを示唆している。さらにジェーンズの神秘的宗教体験には反組織的、反神学的な傾向がかなりあったと、彼の複雑な宗教的事情を明らかにし、そ

のキリスト教理解がいわゆる教会組織と折り合いをつけ難い状況であった事を明らかにした。

13) 同書 p.145

14) 森 前掲書 p.45

15) 同書

森は以下のごとく指摘する。

ジェーンズは熊本バンドの学生たちとの出会いに触発されて、自身の文明理解を形成しました。それは相対主義的、多元主義的、普遍主義的なものであったと思います。

16) 同書 p.43

森は以下のごとくジェーンズ書簡（横井時雄宛）を紹介する事を通し、アメリカン・ボードへの批判を明らかにしている。

「彼らが個人的に異教徒すなわち非キリスト教の民をどう見ているかは、今あまり問題ではない。しかしこの理論をしつこく邪悪に叩き込むことによって、インド・中国・日本の国民をそのようなものとして誤って描きだし、ヒンズー教・仏教・回教などの—あなたがたの神道や半ば宗教としての儒教もだが—宗教としての発展について誤ったばかげた描きだし方をするによって、欧米は人類の四分の三の人びとにたいして、政治的・軍事的・外交的・社会的・宗教的關係を支配しようとしてきたのだ…。ここでの「彼ら」とは宣教師であり、「この理論」とは社会進化思想です。そして、ジェーンズはアメリカがいかにひどい侵略をしてきたかを挙げ、「白人キリスト教徒のうわべだけの愛情と良心は、欧米の力と貪欲による不幸な犠牲者にたいしては麻痺している。そうでないのなら、どうしてこのような、永続的残虐が許されてきたのだらう」とジェーンズのアメリカン・ボード観を明らかにしている。

17) 野本真也「新島襄が出会った『キリスト教』」『同志社スピット・ウィーク講演記録』2005年

18) 新島襄全集編集委員会『新島襄全集 10 新島襄の生涯と手紙』（同朋舎出版、1985年）、pp.128-129

19) 19世紀中葉のドイツにおいて、自由主義神学、復古的神学と並んで影響力をもった神学的立場。信仰と知識の調停を神学的に遂行する。キリスト教と哲学の新たな調停に努めた。調停神学の代表的神学者の調停的態度では19世紀のキリス

ト教を取り巻く知的状況を処理できなかった。(岩波書店『岩波キリスト教辞典』)

- 20) 坂井悠佳「日本組合基督教会の思想的背景－新島襄の神学思想に関する一考察－」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』2020年 参照。
- 21) キリストのキリスト教 (Christianity of Christ) よりキリストの教会 (Church of Christ) に対する関心が強い教育研究機関でもあるため、教会的、教会の神学を模索する中で、説教分析による信仰の内実への探求が有効と考えられたのかもしれない。
- 22) 『上毛教界月報』16 (1900年2月19日)
- 23) 「一人ヲ決シテ見過シテナラス、一人ヲ得、一人ト問答シ、一人ノ心ヲ開クハ伝道ノ上大切ナリ」、「大勢ノ前ニアリテ大喝一声人ヲ驚スノ演説ヲ為スハ多ハ荒コナシナリ 真ノ働キハ却テ個人ヲトクニシカス 基督ヲ見ヨ」(『新島襄全集2 宗教編』 p.313)
- 24) 1875年の現実(カリキュラムから聖書を除去すること)に対抗して新島がS・H・ハーディへ送った書簡  
We will be like an acorn in a bottle. Sooner or later we will burst out.  
(141 To Susan H. Hardy [AC], Kiyoto, Nov.23rd/75)  
私たちは瓶の中のドングリのようなものです。遅かれ早かれ大きく育って瓶を破裂させます。  
「S・H・ハーディへの手紙」(1875)『現代語でよむ新島襄』(丸善、2000)、p.130  
上記の言葉を分析することを通し、新島の神学思想を探求することに一定の意義があると考え得る。
- 25) 新島襄「庭上一寒梅／笑侵風雪開／不爭又不力／自占百花魁」1890年